

(94)

教材「舞姫」におけるエリスの「不在」という「空所」を読むことに関する一考察

岡 田 直 紀

1. はじめに

本稿では、高等学校教科書に収録される定番小説教材「舞姫」での豊太郎とエリスという主人公とヒロインの邂逅の場面を取り上げ、その場面中の豊太郎と出会う前のエリスの「不在」時の状況という「空所」を読むことについて考察する。また、エリスの状況について学習者がどのように推察したかの傾向を整理し、分析する。

小説教材における「不在」に関する考察には、幾田伸司（2011）がある。幾田は小学校3年生の物語教材「おにたのぼうし」における主人公の描写の欠落を読むことに可能性を見出している。本稿はそこに指摘される知見や方法を媒介として、高等学校小説教材の「舞姫」を分析・考察する。

なお、本稿では、エリスが「クロステル巷の古寺」にたどりつくまでの一場面の読みを取り上げている。物語を読み進める中で、この邂逅の場面の読解が学習者の形成する主題に影響を及ぼすことも考えられるが、今回は不在時のエリスの状況の補填に関する試みについて扱い、主題に関しては扱わないこととする。（この場面の「出会い」を「邂逅」と表現する理由もそこにある。ストーリーの全体から判断すると、この場面の「出会い」を良い文脈で使用される「邂逅」と意味付けることには慎重にならねばならないが、未来を知りえなかった主人公とヒロインには、その時点での「出会い」は「邂逅」の意味を持っているからである。）

では、なぜ、この場面の「不在」に着目するのかということである。それには、以下の理由がある。

- (1) 物語の本文中に「不在」時の状況を推測できる情報が散りばめられていることにより、読者の想像の自由を確保しつつも、複数の読者間で、その想像が過度に拡散しないため。
- (2) エリスの「不在」に着目し、それを読者が推察することで、エリスの置かれた状況や心情の理解に関して、深化・拡充を図ることが可能になるため。またそれをきっかけにその他の登場人物の心情について深化・拡充を図ることも可能になるため。
- (3) 「舞姫」は他者の内面描写のない主人公の一人称限定の視点から語られるが、ヒロインの「不在」に着目することで、読者がその語りの影響を離れることになる。それによっ

てエリスを中心とした一人称限定的な視座や、すべての登場人物の内面に入り込める三人称全知的な視座を獲得できる可能性が開かれるため。(その結果、読者自身の読みが再編成される可能性が生じる。)

- (4) 読者が登場人物の「不在」に着目することは「書き方」に着目することでもあり、そこには作者へ遡及する方向が開かれる可能性があるため。(自己の読みが相対化される可能性が生じる。)

(1)の理由は、言い換えれば、この邂逅の場面の出来事が、ある一定の因果関係を持っていることを意味している。そのため、読者は読みの根拠を本文中より示すことができる(＝読みが叙述から乖離しにくい)ということである。(2)～(4)の理由は、この「不在」からもたらされる効果によるものである。

2. 「不在」の定義と「不在」を読むことの効果について

「不在」に関して、幾田は以下のように定義している。

叙述が欠落し、読者が自身の責任において情報を補填しなければならない箇所は、「空所」と呼ばれる。(中略)「登場人物の不在」も叙述が欠落している箇所であり、広義には「空所」の一つであるにとらえてよい。ただし、「不在」は、物語世界内における登場人物の存在の有無を示す、実体的概念として措定している。したがって、その登場人物が不在であるかどうかは共通して認識されるものであり、読者によって差異が生じるものではない。(中略、傍線＝引用者)

幾田は、「不在」は「空所」という広義の概念の一部であるが、読者によって認識に差が生じないものであるという。また、以下のように「空所」と「不在」の差異性と「不在」を読むことの効果を指摘する。

「空所」が読者に違和感をもたらし、それを補填することによって読書行為が推進されるのに比べ、登場人物の「不在」時にかかわる情報は、これを想定しなくても読書行為を進めることができる。「不在」の場における情報を補填することが読書行為を進める必要条件にならないという点で、「不在」は「空所」と異なる面を持つ。

語られないことによって生成する登場人物の不在は、ストーリーの水準では、語られない時空間での出来事を叙述の範囲内で読み込むことの可能性が検討されることとなる。

それと同時に、語りの水準では、語られないことの意義として検討することが必要となろう。そうした作業を通じて、登場人物に対する造詣をふくらませ、読み込まれた情報をコンテキストに取り入れることによって新たな読みの可能性を開くことが、本稿の企図するところである。(傍線=引用者)

幾田は「空所」は読者によって違和感が生じる箇所であり、その補填が読書行為を推進するものだとしている。そして、それとは異なり、登場人物の「不在」は読書行為上想定されなくともよい箇所だと指摘する。しかし、その「不在」を何らかの形で読者が見出し、本文の叙述に即してそれを補填した読みと、「語られない」ということから読者にもたらされる逆説的な効果という2点を情報としてコンテキストに取り込むことは、新たな読みの可能性を開く要所になりうるという。

3. 「舞姫」の豊太郎とエリスの邂逅場面における「不在」とストーリーの展開について

「舞姫」における豊太郎とエリスの邂逅の場面は、豊太郎の回想による一人称限定の視点から描かれている。この場面の叙述は、主に豊太郎の直接経験を時系列で描き出す方法をとっている。したがって、豊太郎の目に映る「場面」や「エリスの様子」と豊太郎への「エリスの発言」とを手がかりとしながら読者はエリスの「不在」を推察することとなる。以下に邂逅の場面の本文を引用し、エリスの「不在」の箇所を指摘する(注¹)。

ある日の夕暮れなりしが、余は獣園を散歩して、ウンテル・デン・リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居に帰らんと、クロステル巷の古寺の前に来ぬ。余はかの灯火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取り入れぬ人家、頬髭長き猶太教徒の翁が戸前にたたずみたる居酒屋、一つの梯は直ちに楼に達し、他の梯は窘住まひの鍛冶が家に通じたる貸し家などに向かひて、凹字の形に引きこみて立てられたる、この三百年前の遺跡を望むごとに、心の恍惚となりてしばしたたずみしこと幾たびなるを知らず。

今このところを過ぎんとする時、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を呑みつつ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六、七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我が足音に驚かされて顧みたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁ひを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、なにゆゑに一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか。

彼は はからぬ 深き 嘆きに 遭ひて、前後を 顧みる いとま なく、ここに 立ちて 泣く にや。我が 臆病なる 心は 憐憫の 情に 打ち勝たれて、余は 覚え ず そばに 寄り、「なにゆゑに 泣きたまふか。ところに 係累 なき 外人は、かへりて 力を 貸しやすきことも あらん。」と言ひかけたが、我ながら 我が 大胆なるに あきれたり。

彼は 驚きて 我が 黄なる 面を うち守りしが、我が 真率なる 心や 色に あらわれたり けん。「君は 善き 人なりと 見ゆ。彼のごとく 酷くはあらじ。また 我が 母のごとく。」しばし 洩れたる 涙の 泉は また あふれて 愛らしき 頬を 流れ落つ。

『我を 救ひたまへ、君。わが 恥なき 人とならんを。母は わが 彼の 言葉に 従はねばとて、我を 打ちき。父は 死にたり。明日は 葬らでは かなわぬに、家に 一銭の 貯へだになし。』

あとは 歎歎の 声のみ。我が 眼は この うつむきたる 少女の ふるふ 項にのみ 注がれたり。

「君が 家に 送り行かんに、まず 心を 鎮めたまへ。声を な 人に 聞かせたまひそ。ここは 往来なるに。」彼は 物語するうちに、覚え ず 我が 肩に 倚りしが、この 時 ふと 頭をもたげ、また はじめて 我を 見たるがごとく、恥ぢて 我がそばを 飛びのきつ。

人の 見るが 厭わしさに、早足に 行く 少女の あとに つきて、寺の 筋向かひなる 大戸を 入れば、欠け損じたる 石の 梯 あり。これを 登りて、四階目に 腰を 折りて 潜るべきほどの 戸あり。少女は さびたる 針金の 先を ねち曲げたるに、手を 掛けて 強く 引きしに、中には しはがれたる 老嫗の 声して、「誰ぞ。」と 問ふ。エリス 帰りぬと 答ふる 間も なく 戸を あららかに 引き開けしは、半ば 白みたる 髪、悪しき 相には あらねど、貧苦の 痕を 額に 印せし 面の 老嫗にて、古き 獣綿の 衣を 着、汚れたる 上靴をはきたり。エリスの 余に 会釈して 入るを、彼は 待ちかねしごとく、戸を はげしく たて切りつ。

余は しばし 茫然として 立ちたりしが、ふと 油灯の 光に 透かして 戸を見れば、エルンスト・ワイゲルトと 漆もて 書き、下に 仕立物師と 注したり。これ すぎぬといふ 少女が 父の 名なるべし。内には 言ひ争ふごとき 声 聞こえしが、また 静かになりて 戸は 再び 開きぬ。さきの 老嫗は 慰慰に おのが 無礼の 振る舞ひせしを 詫びて、余を迎え入れつ。戸の内は 麝にて、右手の 低き 窓に、真白に 洗ひたる 麻布を 掛けたり。左手には 粗末に 積み上げたる 煉瓦の かまど あり。正面の 一室の 戸は 半ば 開きたるが、内には 白布を 掩へる 臥床 あり。伏したるは 亡き 人なるべし。かまどの そばなる 戸を開きて 余を 導きつ。この ところは いはゆる「マンサルド」の 街に 面したる 一間なれば、天井も なし。隅の 屋根裏より 窓に 向かひて 斜めに 下がれる 梁を、紙にて 張りたる 下の、立たば 頭の つかふべき ところに 臥床 あり。中央なる 机には 美

しき 髷^{かも}を 掛けて、上には 書物一、二巻と 写真帖^{しやしんぷ}とを 並べ、陶瓶^{たうへい}には ここに 似合は
しからぬ 備^{あたひ} 高き 花束^ちを生けたり。そが 傍ら^{わもと}に 少女^{はぢ}は 羞^{はぢ}を 帯びて 立てり。

彼は 優れて 美なり。乳のごとき 色^{いろ}の 顔^{おもて}は 灯火^{とうし}に 映じて うす紅^{くれなゐ}を 潮^さしたり。手足
の かほそく たをやかなるは、貧家^{ひんか}の 女^{をみな}に 似ず。老嫗^{らうおな}の 室^{へや}を 出でし あとにて、少女^{をとも}
は 少し 訛^{なま}りたる 言葉にて 言ふ。「許したまへ。君を ここまで 導^いきし 心なさを。君は
善き 人なるべし。我をば よも 憎^{にく}くみたまはじ。明日^{あした}に 迫^{おそ}るは 父^{はふ}の 葬^{はふ}り、たのみに
思^{おも}ひし シヤウムベルヒ、君は 彼^かを 知らでやおはさん。彼は「ヴィクトリア」座^ざの
座頭^{ざがしら}なり。彼が 抱^{かか}へと なりしより、はや 二年^{ふたとし} なれば、事なく 我^{われ}らを 助^{たす}けんと 思^{おも}
ひしに、人^{ひと}の 憂^{うれ}ひにつけこみて、身勝手^{みんが}なる 言^{こと}ひかけせんとは。我^{われ}を 救^{すく}いたまへ、君。
金^{かね}をば 薄^{うす}き 給^{たま}金を さきて 返^{かへ}しまるらせん。よしや 我^{われ}が 身^みは 食^くはらずとも。それも
ならずば 母^{はは}の 言^{こと}葉^はに。』 彼^かは 涙^{なみだ}ぐみて 身^みを ふるはせたり。その 見^み上^あげたる 目^めには、
人^{ひと}に 否^{いな}とは 言^{こと}わせぬ 媚^{めい}態^{たい} あり。この 目^めの はたらきは 知^しりてするにや、また 自^{みづか}らは
知^しらぬにや。

我^{われ}が かくしには 二、三「マルク」の 銀貨^{ぎんが} あれど、それにて 足^{たり}るべくもあらねば、
余^{われ}は 時計^{じけい}を はづして 机^{けい}の 上^{うへ}に 置^おきぬ。「これにて 一時^{いちじ}の 急^{いそ}を しのぎたまへ。質屋^{しちや}
の 使^{つか}ひの モンビシウ街^{もんびしうかい}三番地^{さんばんち}にて 太田^{おくだ}と 尋^こね来^きん 折^をには 備^{あたひ}を 取^とらすべきに。」
少女^{をとも}は 驚^{おどろ}き 感^{かん}ぜし さま 見^みえて、余^{われ}が 辞^し別^{べつ}の ため^{ため}に 出^いだしたる 手^てを 唇^{くちべ}に あてた
るが、はらはらと 落^おつる 熱^{あつ}き 涙^{なみだ}を 我^{われ}が 手^ての 背^{そで}に そそぎつ。(囲み、傍線=引用者)

上記本文の囲みの箇所がエリスの「不在」を推察するのに必要最低限の叙述や会話であり、
下線部は「不在」時の状況について推察する内容を豊かにすると思われる部分である。その
箇所を、以下に叙述の通りに抜粋し並べる。

(1) 鎖^{とど}したる 寺門^{じもん}の 扉^{かど}に 倚^よりて、声^{こゑ}を 吞^のみつつ 泣^なく ひとり^{ひとり}の 少女^{をとも} あるを 見^みたり。



(2) 「我^{われ}を 救^{すく}ひたまへ、君^{きみ}。わが 恥^{はぢ}なき 人^{ひと}と ならんを。母^{はは}は わが 彼^かの 言^{こと}葉^はに 従^{したが}
はねばとて、我^{われ}を 打^うちき。



(3) 父^{ちち}は 死^しにたり。明日^{あした}は 葬^{はふ}りでは かなわぬに、家^{いえ}に 一銭^{ひとせん}の 貯^{たくは}へだに なし。」



(4) 明日^{あした}に 迫^{おそ}るは 父^{はふ}の 葬^{はふ}り、たのみに 思^{おも}ひし シヤウムベルヒ、君^{きみ}は 彼^かを 知らでや
おはさん。彼は「ヴィクトリア」座^ざの 座頭^{ざがしら}なり。彼^かが 抱^{かか}えと なりしより、はや 二年^{ふたとし}
なれば、事なく 我^{われ}らを 助^{たす}けんと 思^{おも}ひしに、人^{ひと}の 憂^{うれ}ひにつけこみて、身

勝手なる 言ひかけせんとは。我を 救いたまへ、君。金をば 薄き 給金を さきて 返しまるせん。よしや 我が 身は 食らはずとも。それも ならずば 母の 言葉に。

※出来事が起きた実際の順序は(3)→(4)→(2)→(1)となる。

この4箇所から、「鎖された寺門」(＝鎖された教会の門)の前で泣くエリスが、それまでのような行動をしていたのが最低限推察できる。まずエリスがなぜ一人で泣かねばならなかったのかという理由や状況を考えてみよう。エリスの発話から、一人で泣く理由や状況としては以下の3点を読み取ることができる。(ここではエリスの経験の時系列で記述する。)

- (1) 父が亡くなり、さらに埋葬の費用も準備できない状況にあるため。
- (2) 父の埋葬代金の借入を願い出るも、受け入れがたい要求をする座長との不仲のため。
- (3) 貧困から座長の言葉に従うよう命令し、手を上げる母との不仲のため。

エリスは父の死を始めとして、本来ならば頼りに出来る人物との関係が断たれている上に、貧困が追い討ちをかける絶体絶命の境遇にある。

そのエリスがどのような行動の果てに教会へとたどり着いたのであろうか。そして豊太郎が目撃するまでの間、鎖された門の前で(あるいは中で)エリスは何をしようと、あるいはしていたのであろうか。この一連の箇所が教材「舞姫」の邂逅の場面におけるエリスの「不在」の箇所である。父が亡くなった後に座長を頼り、その後、家へ戻り、そして母の下から去った挙句の果てに教会へとたどり着くという大まかなエリスの行動は学習者の共通理解が図れる箇所である。しかし、このエリスの行動の一部始終に関する具体的な内容の推察は個々の学習者の中で異なってくる。例えば、父の亡くなった悲しみに暮れる中、母と差し迫る埋葬について相談をする場面や、そういった場面を思い描かず早足で座長を尋ねる場面を思い描いたりすることなどが考えられる。また、エリスが教会の門の前で(あるいは中で)何をしようとしていたのか(あるいは何をしていたのか)という箇所は、叙述上の空白の度合いが大きく、推察の自由度が増すことになる。例えば、単純に祈りを捧げていたという想像から、それに加えて金策に奔走するも誰も助ける余裕もなかったといった想像なども可能である。

4. 邂逅の場面の「不在」に関わる「語り」の特徴について

上記でエリスの「不在」の箇所を指摘したが、ここでの「不在」に関わる「語り」の特徴を以下に一度整理する。「語り」に注目するのは、「舞姫」の「語り」の特徴が「不在」を生んでおり、「語り」に注目することで「不在」を補填することでもたらされる効果や、学習者がその際に行わなければならない作業がより明らかになると考えられるためである。

(1) 豊太郎の一人称限定視点から語られる。そのため読者は、エリスの発話から断片的に開陳される情報を再構成し、それを根拠に「不在」の箇所の内容を推察しなければならない。

(2) より自由度の高い推察が必要になるような大きな「不在」がある。
 なお、以下の※印が欠落の大きな箇所を具体的に示したものである。

「母は わが 彼の 言葉に 従はねばとて、我を 打ちき。」

エリスの「不在」

↓ ※エリスが家を飛び出したという明示的な叙述は存在しない。
 ※豊太郎と出会う直前まで教会の閉ざされた門の前で何をしてい
 たのかという叙述も存在しない。

「鎖したる 寺門の 扉に 倚りて、声を 呑みつつ 泣く ひとりの 少女 あるを見たり。」

(3) 本文は一人称限定の視点で語られる形であるが、その「語り」から「不在」の内容を推察し、その推察を契機として、主人公やヒロイン以外の人物の状況や行動、心理を読者も追うことの出来る構造になっている。

(4) 「不在」の推察を豊かにする象徴的な描写や情景描写（＝上記本文中の傍線部の一部）が場面中に数多くある。

以下に一部を例示する。

例) 夕暮れ → 迫りくる闇の暗示であり、エリスの猶予の無さや不安などが読み取れる。

クロステル巷の街並み → 貧困、前近代、伝統などと読み取れる。

鎖ざされた寺門 → エリスの閉ざされた運命、神聖さなどと読み取れる。

着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず → 純潔、天使、神聖、善などと読み取れる。

(1)(3)(4)は本文上における読者に対する情報の提供のされ方に関するもの、(2)は情報の「語られなさ」に関するものである。特に(2)の「語られなさ」が「舞姫」の「不在」を特徴づけるものである。また、(1)(2)(3)(4)からは、学習者には本文から提示される情報を並べ替えて整理することや、様々な箇所を関連付けること、象徴や情景描写について理解することが要求されるといえよう。本節では、以下より、「舞姫」の語り方がもたらす「不在」を読み込むことで生じる効果について言及する。

5. 「舞姫」の語り方がもたらす「不在」を読み込むことで生じる効果について

まず、「舞姫」の語り方がもたらす「不在」を読み込むことで生じる効果について整理する。人物の状況や心情理解などに関するものとしては、次の点を指摘することができる。

(1) エリスの置かれた状況や心情、行動の理解に関して、深化・拡充を図ることが可能である。

(2) (1)の深化・拡充された理解を元に、エリスの母の置かれた状況や心情、行動の理解に関して、深化・拡充を図ることが可能である。

例えば、欠落の度合いの大きな箇所は、「夕暮れ」等の叙述に着目することで推察の内容

を豊かにすることができる。加えて、エリスの「不在」時の行動や心情が推察されれば、母である老嫗の「不在」時の状況や、行動から推察される心情が学習者の中で鮮明に思い描かれることになる。

エリスの「不在」を学習者が補填する行為が生む効果として、次の点を挙げることができる。

- (1) 学習者に形成された読みに劇的さが付与されることで、読みがダイナミックなものになる。
- (2) 語り手の一人称限定の視点から学習者が抜け出すことで、自身の読みを再編成する契機になる。
- (3) 「書き方」から作者へ遡及する回路が開かれるきっかけとなる。

例えば、エリスの「不在」を学習者が推察し補填することで、エリスの目線から豊太郎の登場を意味付けることができる。場面中の様々な象徴的な描写から、「不在」は、「夕闇の中、万策尽きたエリスが閉ざされた寺門の前で泣きながら神に懇願していた」とも補填できる。そのようなとき、神に願いが届いた運命かのように豊太郎が現れる。この劇的さは、豊太郎の一人称限定視点以外の視座に立たねば成り立たないものである。

本文中に描かれなかったエリスの状況を推察することは、豊太郎の一人称限定視点では直接示すことのできない「エリスから見た豊太郎との出会い」という読みを生むため、豊太郎以外からの視点が生まれるという意味で学習者の読みが立体的になる。言わば「出会い」という出来事が複数の視点から解釈されるという形で、読みが再編成されることになるのである。

またエリスの「不在」に着目するということは、「書き方」から作者へ遡及する可能性があるということである。豊太郎の手記を構成しているのはあくまで作者であり、その作者を読み手が意識することもこの場合には起こりうる。例えば、作者が「不在」を意図的に仕組み、読者にその場面を思い描くことを委ねたのではないかといったことを読み手が考えるような場合である。これは別言すれば、登場人物たちに同化するという次元とは異なる、「書き方」という次元から小説を読むということである。これは、登場人物に寄り添って作られた自己の読みをメタレベルから把握する方法にもなりえるだろう。つまり、登場人物に同化して読む解釈と「書き方」に着目して読む解釈という二つの読みを足場として、出来事や登場人物たちの行為を一步引いて見る読みを生みだすことなどが可能になる。エリスの「不在」時の状況を推察することは、このような形で自己の読みを個人内で相対化する可能性を孕むものである。(なお、ここでは自己内対話について触れたが、これは「話し合い」などの活動から認識に至ることも可能である。)

6. エリスの「不在」を学習者が実際に推察し補填した場合の傾向

最後に、学習者がエリスの「不在」を推察し補填したものの傾向を報告する。授業を行ったのは、第3学年の現代文で、全5クラス160名程度、希望進路が国公立大学から専門学校、就職まで多岐にわたる筆者が以前に勤務した公立の高等学校である。小説の読解を目標の中心としたため、言葉の理解について生じる困難さを減らすために現代語訳を配布して行った。豊太郎とエリスの邂逅の場面の授業の際には以下の発問を行い、その後「不在」を推測し記述する形を取った。発問は以下の2つである。

- (1) エリスはどうして一人で泣いていたのか。理由を3つ挙げよ。
- (2) エリスは教会で何をしていたのか。

(1)の補助発問を行ったのは、学習者がこの場面の状況を把握し(2)の発問を考える際のレディネスを用意するためである。(2)の発問を行ったのはエリスの「不在」について直接問うためである^(注2)。学習者の回答の傾向は、以下のものを何らかの形で組み合わせたものになった。

- (1) 教会に関するもの。
 - ①一度教会へ入場したもの。
 - ・祈りに関するもの。
 - ・牧師に話を聞いてもらったもの。
 - ・鎖された門に象徴的意味や情景を読み取ったもの。
 - ②門が鎖されていたために入場できなかったもの。
 - ・祈りに関するもの。
 - ・鎖されていた門に象徴的意味や情景を読み取ったもの。
- (2) 教会へたどり着く以前に言及したもの。
 - ①金策に奔走するも誰の助けも得られなかったもの。
 - ②行く当てが無く誰にも頼れずに一人で悩み街を彷徨うもの。
- (3) 他の小説教材の登場人物に影響を受けたもの。

必ず回答があったものは、教会に入場した、しないに関わらず、祈りに関するものか、牧師へ話を聞いてもらっていたというものである。その読みに、鎖されていた門に象徴的意味や情景を読み取ったものや(2)や(3)の内容が何らかの形で加わったものも存在した。また、鎖された門の描写からは、「エリス自身が運命の終焉を自覚する」という内容を思い描くものがあった。そこには、単に事物の描写以上にエリスの心情や象徴が重ねて読み込まれていた。

(2)は、発話から時系列でエリスの行動を再構成し回答したものである。興味深いのは、(2)①の読みが、補助発問で網羅しきれない「彼は 涙ぐみて 身を ふるわせたり。その 見上げたる 目には、人に 否とは 言わせぬ 媚態 あり」などの描写から、エリスのたくましい性格の一面や必死さを前景化させたものになっていることである。これに対し、(2)②の読みは、

エリスは座長だけが唯一の頼りと考えていたという解釈に立脚し、エリスの弱さを前面に押し出し、誰かにすがらねばならない人物像を前景化させたものになっている。

(3)にあたるものとして、これからどうすべきか当てもないままエリスが途方に暮れていたという内容のものが見られた。これは「羅生門」の語り手が門前にたたずんでいた下人の心情を読者に説明する場面の記述とほぼ同内容の記述であり、門前の人という類似関係から、他の小説教材の影響を受けて解釈を作ったものと見なせる。篠原武志(2006)には学習者が豊太郎と「山月記」の登場人物、李徴との人物造詣の類似を見出している例もあり、他の定番教材が教材「舞姫」の読みの形成に大きな影響を与えている可能性もある。

7. おわりに

以上、本稿では、「舞姫」におけるエリスの「不在」について教材分析と考察を行い、このエリスの「不在」を補填する際の学習者の読みの傾向を分析し、報告した。

教材分析からは、エリスの「不在」が主人公の一人称限定の視点から語られることで生じる「空所」であることを指摘した。また、その「不在」を推察し補填するための根拠や象徴的な描写、情景描写が様々な場所へ配置されていることも指摘した。

これらの考察を通して「不在」に関わる効果について次の点を指摘した。まず、修辭的な効果についてである。「不在」を推察し補填することで語り手以外の視座の獲得が可能となり、ヒロイン等の人物に学習者が同化する回路が開かれる可能性が生じる。それにより、状況や心情の把握がより鮮明になることについて触れた。続いて、「不在」を推察し補填する行為そのものが、劇的さやダイナミズムを生むことを指摘した。それに加えて、「不在」を推察し補填した後に、それを元にして自身の読みを再編成することが可能なことに言及した。また、「書き方」や作者に目を向け、それとの比較から自身の読みそのものを学習者が相対化して把握することにより、自らの読みの傾向の把握に繋がる可能性を指摘した。そのような行為によって、自身の読みの傾向以外の読みが生み出される可能性があることにも言及した。

また、学習者の「不在」の補填の傾向には3つの観点があったことを指摘した。

課題としては、エリスの「不在」を推察し補填するという作業の特性上、エリスの行為を一步引いた立場から眺める批判的な読みの生成を隠す可能性もあるということが挙げられる。また、それは同時に書き方から注意が逸れる可能性が生じるということでもある。これらは本稿では検証が不十分であった、学習者が自身の読みの傾向を把握し、それを基盤として新たな読みを創出することとも関わりのある課題である。そのため、上記2つの発問に加えて、『「不在」が文章中にあることでどのような効果が生まれると考えられるか』といった発問を行い、学習者が自ら考える機会を提供することで、表現や「書き方」へ着目を促す必要もあ

るとも考えられる。

また、他教材における「不在」にはどのようなものが具体的に存在するのかということを明らかにすることや、「舞姫」と他の定番小説教材との関連性や順序性について検討することも今後の課題である。

注

- (1) 授業では東京書籍刊行の『精選現代文』（2010年度版）を使用した。なお、本稿での場面分けは、上記教科書に従った。
- (2) 発問は状況により調整可能である。(1)の発問は省略することも可能であり、(2)の発問はエリスの行動の一部始終がより示され易いものにすることができる。

〈参考文献〉

- 幾田伸司（2011）「語られなかった状況を読むことの可能性—物語テキストにおける登場人物の「不在」に着目して」『国語科教育』70、pp.28-35、全国大学国語教育学会
- 篠原武志（2006）「『舞姫』授業とフォローアップ試論—生徒の「論」を交差させる試み—」『同志社国文学』、pp.42-53、同志社大学国文学会

（おかだ なおき・山口県立徳山総合支援学校）